

北斗(ほくと)

登録番号：第368号

登録年月日：昭和58年2月24日

登録者：青森県(青森市長島1-1-1)

育成者：山田三智穂 鈴木長蔵

石山正行 北山 弘

佐藤 耕

来歴：「ふじ」と「陸奥」の交雑実生

特 性

■栽培特性

樹勢は「ふじ」より強く生長が早い。わい性樹では、下部の側枝が大きくなり過ぎる傾向がある。このような枝は、切除するか切りつめる。花芽は比較的着きやすい。「北斗」の受粉には、「つがる」、「王林」など、3倍体以外の主要品種はほとんど使えるが、「ふじ」と「紅玉」は不適當である。「北斗」は3倍体なので、花粉は使えない。斑点落葉病には「ふじ」より弱く、「スターキング」より少し強い。黒星病にはり病性である。

■果実特性

果実は350～400gで円形、色は紅色で薄い縞が入る。果肉は黄白色でやや硬く、ち密で果汁が多い。糖度は14度前後、酸度は0.35%前後で、食味は甘く、芳香がある。硬度は15～16ポンドである。青森県での収穫期は10月下旬である。収穫が早過ぎると貯蔵中にビターピットが多くなり、遅れると果肉の軟化、酸味抜けによる食味低下、ヤケ病などの問題を生じやすい。ヤケ病を考慮すれば、冷蔵での貯蔵力は、1月末頃までである。

■問題点と対応策

これまで指摘された「北斗」の問題点は、着色不良、果肉の軟化、芯かび、ヤケ病などである。暖地、排水不良地、肥沃地は、「北斗」の栽培に不適當である。樹勢が強いと果実が大きくなり、着色不良、果肉の軟化につながる。窒素肥料を減らして、新梢の長さが20～25cmにおさまるようにする。水平な枝よりも下がった枝に400g程度の良い品質の果実が成るので、他の品種より樹勢を弱目にすることが大切である。最大の欠点である芯かびは、この品種が遺伝的に持っている性質が関係していて、完全に無くすることは困難である。「東光」の芯かびと同じように、側果や小さい果実に発生が少ないので、果実を小さ目に作る。基本的には、樹勢の調節である。ヤケ病は、主によく熟した果実の陽向面に発生する。1月以降に発生が多くなるので、青森県では年内販売を主眼としている。

■地域適応性

平成2年の青森県における「北斗」の栽培面積は、約1,710haで、リンゴの全栽培面積約25,393haの7.0%である。平成7年の目標は、全生産量600,000tの15.0%である90,000tとしている。

(石山正行)